

筆者らは、「これからの社会のために、よりよい学びとは何かを考え、学びの場を自ら創りだし、増やしていく」というコンセプトの下、NPOのスタッフとして、ワークショップの理論と実践を往復しながら学ぶ大学生向けの勉強会をネット上で展開している。

筆者は述べる。「学術の世界においては、さまざまな人が改善できるように

研究の問題・目的・方法・結果を公開すること

が大切にされている。新しいアイデアを持つ

人々がその知見を利用し、イノベーションを起

すことができるからである」。

本書でも、あくまでも教育の視点から、一見「遊び」に見えるような活動も許容されるワークショップについて、活動目標と学習目標を設定し、これを達成するための「P（企画）―D（運営）―C（評価）」の各段階の展開について、既存の理論を援用して実践的に解説する。

ここで、相対的評価から診断

ワークショップデザイン論

創ることで学ぶ

WORKSHOP DESIGN

山内祐平 Yuhel Yamauchi
森 玲奈 Reina Mori
安斎勇樹 Yuki Anzai

監修 山内祐平

山内祐平、森玲奈、安斎勇樹 著

1890円 慶應義塾大学出版会

☎03-3451-3584

ワークショップデザイン論

創ることで学ぶ

的評価への転換が重視され、新しい評価手法が紹介される。特に、「予期されていなかった学習」を見落とさず、次のA（改善）に反映させる、いわばPDCAサイクルの実現が目指される。このとき、一般的な論では、AからPに循環するのであるが、ワークショップでは、もっと実践的なモデルが想定されている。適切な評価による修正が、分析、設計、開発、実施の全てのプロセスに対して迅速に、直接的に行われるのである。

フィールドに出て、地域で暮らし、働く人々に接しながら学ぶことができない場合でも、このような実践的PDCAサイクルに基づいたワークショップの展開によって、自由で柔軟な教育活動としての可能性はより高まるものと考えられる。

（聖徳大学教授・西村美東士）

BOOK

ブック